

# 光って遺伝子機能解析

日を四月二十七日に推定。告した西松樹が「声明」十九公死にした。

## 薬剤探索に活用も

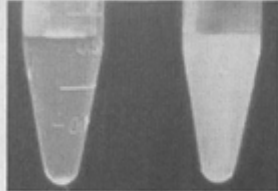
生きた細胞内で特定の遺伝子の配列や働きを抽出する分子(プローブ)の新たな作成手法を、京都大学理学部・青田安彦教授(化学)と山田崇助教(化学)が、山田助教の所属する京都大学の成田教員たちのグループが開発した。多色発光で検出する遺伝子配列で、複数の遺伝子の同時解析が可能になるという。二十日、大阪府吹田市で開催される日本化学会春季年会で発表する。

### 京大グループ開発

このプローブ作成手法は、他の色素にも応用可能で、さまざまな色で特定配列のDNAやRNAを光らせることが可能になる。遺伝子診断や機能解析、薬剤の探索などに活用できるという。研究グループは、特定配列のRNAと結びつく構造が変化して蛍光タンパク質を発光するmRNA(モレキュラービーコン型mRNA)も開発、同学会で報告する。

山田助教は、「いずれも天然と同じタイプの様を用いているので、生きた細胞での観察が可能だ」と話している。

開発した細胞プローブとヘキスト細胞体での実験。標的となるDNAがある時(写真左)は、ない時(写真右)と比べて強く発光する。



遺伝子のDNAに結びついて発光する青色蛍光色素へキストの一部を改造して、特定のDNA配列に結びついた時だけ発光するヘキスト類似体の組み合わせを見